
あなたが一番好きなの！！

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたが一番好きなの！！

【Zコード】

N4757D

【作者名】

peach-pit

【あらすじ】

元「私はヤクザの18代目」です！やくざ18代目の朝方離あさがたひな。海で運命の人にはなれない。その人の想いは・・・？

海へ Let's go!!! (前書き)

（登場人物）
朝方雛。あさがたひな。
雛の兄・朝方拓巳。あさがたたくみ。
雛の姉・朝方絢紗。あやさ。

海へLet's go!!!

「行つてきまーす」

私は恐る恐るドアを開ける。

しかし、ドアの前にはすでに男達がズラツと並んでいた。

「行つてらつしゃいやせ。お嬢ーー!」

そつ私の家はヤクザなのだ。

私は18代目。

まあいちお喧嘩は得意だし、キレると顔が怖いって言われるし···。

いちおヤクザには向いてるんだけどね。

ガチャッ

1人の男が車のドアを開けてくれる。

私はその男に一礼して車に乗り込んだ。

プロロッ・・・

男がドアを閉めたとたん車は動き出した。

今日は海へ行くのだ。

まあ、拓兄たくにいと絢姉あやねえと私だけだけどね・・・。

「雛ひな 新しい浮き輪買つといったからな」

私の世話をしてくれる拓兄たくにいは一ツ「コリ」と笑いながら顔を後に向ける。

私実はカナヅチなんだよね・・・。

「雛ひな。今日は海でカツコイイ男見つけんだよッ！」

少し男っぽい絢姉あやねえはガツツポーズをしながら白い歯を見せる。

2人とも私の心配しすぎだし・・・。

「わ、分かってるよ！一人とも私のことよりも自分の心配して？ね

？」

毎回のことながらも苦笑いの私。

2人はシウン・・・としながら前を向く。

拓兄にいさんは海に入ると自分が自分じゃなくなつてナンパしまくつたり、海を泳ぎまくつたりするし、絢姉あやねえは自分には全然彼氏を捕まえる気配ないのに私のことばっかだし。

心配してくれるのは嬉しいんだけど自分のことを考えつてのー

約20分で海に行く為の駐車場に到着。

私達は車から降りる。

「わあーー海きれーー」

私は駐車場から見える海を眺める。

「あんまはしゃべなよー」

拓兄たくにが頭をポンッと叩く。

「わかつてますよ」

私はほつペをプウッと膨らませる。

そのほつぺを絢姉が突付き、ケラケラと笑う。
あやねえ

たくじ
あやねえ

た
く
に
い

2人ともあたしのためだと思つてくれてるんだよねえ。

「ありがとう
拓兄」

私は二ツコリ。

満面の笑みをする。

ひそかに癒しオーラを出す。

「雛は可愛いなあ も。行こつか！」

拓兄は私の手をギュッと握つて引っ張る。

「あ～ん！置いてくなあツ！――――――」

絢姉^{あやねえ}は困った顔をしながら私達を追い駆けて来る。

私たちは浜に着いた。

洞窟内での出会い（前書き）

『登場人物』
朝方離。あさがたひな。
杉本晃。すぎもとひかる。

『拓巳・絢紗』

洞窟内での出来事

「海だ。海だあ 」

私はおおはしゃぎ。

「拓兄！ 紗姉！ ちょっと遊んで来る。」

「え？…」

2人は思わず声を合わせる。

へ？

なぜ合わせるの？

ただ遊びに行くだけなのに・・・？？

「迷子になるなよ！」

「男に襲われるんじゃないよ！」

2人は私の目をギンギンと睨む。

「はいはい・・・」

私は実際飽きていた。

いつものことだけ飽きてしまう。

心配しそうだつづーの・・・。

私はその場にいたくなくて全速力でその場から離れた。

私は岩のあるところへと着いた。

「あれえ? ハハビニアだろ?」

私は初めてこの海に来たので興味津々。

いろんな所を覗く。

岩の奥や海の中。洞窟まであった。

私はその洞窟に興味を持ち、入って行く。

洞窟の中は予想どおり真っ暗。

水のしづくがポチャーンッと落ちる音が洞窟内に響く。

奥まで行くと

ガツ

何かに引っかかり転んでしまった。

「痛つたあ～・・・」

打つた所をこすりながら立ち上がる。

後を見ると何かある。

え・・・?

ま、ま、まさか死体?!

「痛つてえなあー・・・」

ありや?

男の人の声??

この人生きてるし。

でも暗くてよく見えない。

「あれ・・・? あんた誰?」

よく見えないが男の人はこっちを見ているようだ。

「これじゃ見えねーよな」

そう言うと男の人はカチッカチッと何かを鳴らす。

その音が聞こえなくなるとボツと明るくなつた。

男の人がライターに火をつけたようだ。

「女・・・？」

男の人は眠い目をこすりながらこっちを見る。

「あな・・・たは？」

「俺は 杉本晃^{すぎもとひかる}。おめーは？」

「私は 朝方離^{あさがたひな}」

よかつた・・・。

まともに話せそうな人だ。

秘密の場所（前書き）

（登場人物）
朝方離離
あさがたひな
杉本晃
すぎもとひかる

秘密の場所

「なんで△△にいるの？」

私は普通に問い合わせる。

寝てた

ね
・
・
・
、
寝
て
た
・
・
・
・
?

こんな真っ暗なところで？！

すこしなあ

「…………俺の秘密の場所なんだ」

秘密の場所

「俺が初めてこの海に来たときに見つけたんだ。だから俺の秘密の場所」

「……………」

私は頭を下げる。

「え？！なんで謝んだよ？」

「だつて……晃君の秘密の場所なのに勝手に上がり込んでしゃつ

て・・・

私は怒られると思い、ギュッと目を開じる。

「そんなの別に気にしてねーよ」

「・・・え？」

私は閉じていた目を開き、晃君の顔を見る。

「それにお前だつたら別にいいし」

晃君は顔を赤くした。

・・・晃君つて優しいんだあ。

「ありがと」

私はまた満面の笑み。

癒しオーラもまた出す。

「おっ」

晃君は耳までも赤くしていた。

可愛い・・・

「えつとさ・・・、お前
あーわりい。じゃあ、^{ひな}雛^{ひな}か?」

・・・雛・・・

私の胸がトクンッと脈打つ。

「うん!」

私は嬉しかった。

なんでかは分からぬけど、拓兄に呼ばれるよりも嬉しかった。

なんでだろ・・・?

外を見ると、もう夕日が沈みかけていた。

「やばい…もう帰りなきゃ」

きっと2人とも心配してるよ・・・。

「そっか」

一瞬だけ、晃君ひかるが寂しい顔をしたのを私は見逃さなかつた。

「・・・まだどこかで会えるよーってか、会おーーー。」

私はニッコリと笑う。

「・・・だな」

私はその言葉を聞き遂げると手を振りながら洞窟を後にした。

また・・・会えるよね?

なんと・・・！（前書き）

『登場人物』
朝方離。
あさがたひな。
ひつじ・加絵。
かえ。

『杉本晃・担任の先生』

なんと・・・!

ボ
ツ

私は昨日、
晃君に会つてから頭が真つ白。
ひかる

何も考える事が出来ない。

・・・なんでだー?

「雛。ひな今日は学校でしょ？」

「< · · ?」

私は
瞬固まる。

私は今日が学校ということを思い出し、叫んだ。

אָמֵן, אָמֵן, אָמֵן.

すっかり忘れてたよお！

私はドタバタ。

家中を走り回る。

「ひな
加絵ちゃん！」飯よ

ひつじの加絵さんが急いでる私を呼び止める。

「そんな暇ねーんですよッ！」

私はイラついてるせいで顔を怖くしてしまった。

「ひいいつ

加絵さんは顔が真っ青になつた。

まあ・・・よくあることなんだけどね。

私は制服に着替え、かばんを持ち、外に出た。

「お嬢！」

1人の男が車を私の前に止め、窓から声をかける。

私は遅刻したくないので嫌々車に乗り込んだ。

5分も経つと学校に着いた。

私は近くに止めてもらい、そこで降りた。

「ありがとう」

私は軽く挨拶すると全速力で走る。

ギリギリセーフで教室のドアを開けた。

「おはよう」

私は息切れしながらもいつもかかさずしている挨拶をする。

「おはよう」

みんながいつも答えてくれる。

・・・ いじへく嬉しい

「せりーー席につけーーー！」

先生の掛け声と共にみんなが自分の席に座る。

先生はよしよしといなずく。

「今日は珍しく転入生だ」

みんなは先生のこの言葉を聞き、ワ�ッと叫ぶ。

ガラッ

教室のドアが開く。

入つて来たのは・・・

なんとーー^{ひかる}晃君だった。

転校理由（前書き）

朝方離登場人物
あさがたひなすきもとひかる

転校理由

「**晃君**が・・・なんで?!

「**杉本晃**です。よろしくつス」

「**晃君**は軽く挨拶。

女子のみんながキャーッと叫ぶ。

・・・だつて**晃君**、カツコイイもん

バチツ

一瞬、**晃君**と視線がぶつかる。

「**晃君**は視線がぶつかった瞬間、ウインクしてくれた。

ドキンッ

私の胸が高鳴る。

・・・やつぱり。

やつぱりまた会えた

昼休み、晃君の席を見たけど、そこには晃君の姿はなかった。

・・・あれ？

どこに行つたんだろう？？

私は晃君を探しに教室を出た。

保健室や体育館を見たけど何処にもいない。

最後に中庭を見てみることにした。

すると、中庭の一番目立たない芝生の生えているところに晃君が寝ていた。

「晃君ー。」

私は思わず呼んでしまつた。

「ん？」

晃君は私の声に気がつき、起き上がる。

「どうした？ 離

・
・
離

つについ顔を赤らめてしまつ。

「口にいたんだ」

「誰にも見つかりたくないんだ」

「あ。お前には別に見つかってもいいんだけどな」

晃君は一いつと笑う。

「ありがと・・・」

私は小さな声でボソッと言ひ。

「あ？ なんて？？」

「なんもないよーだ」

私はからかうかのよひに話をベーッと出す。

「……どうしてこの学校に転校してきたの？」

私はずっと聞いたかつたことを口に出す。

ひかる
晃君は何秒か黙り込む。

「……彼女のいる学校が「」は近いんだ」

「え？」

かの・・・じょ??

嘘・・・。

思わず目から涙が溢れてしまつ。

「彼女・・・いるんだ?」

私の声、思わず震えてる。

これじや泣いてるのバレちゃう。

「・・・ああ

「『メン。・・・戻る』

私は教室に向かつて走つた。

「ひな雛ー?」

ひかる
晃君の呼び止めも聞かずには・・・。

涙の訳（前書き）

杉朝方登場人物
木見朝離登場人物

涙の訳

私は泣いている顔を見つかりたくない下を向きながら教室に入り、自分の席に座る。

座った瞬間私はつむぎ、声を殺して泣いた。

・・・ 晃君に・・・ 彼女がいたなんて・・・。

晃君力ツコイイもん。モテるに決まってる。

その中の女子を選んだんだ。

きっと・・・ 私よりも美人だ。

無理だよ・・・。勝ち田なんかない。

私はそんなことを考へていると、余計に涙が出てくる。

・・・ やだよ。

なんで彼女なんているのよツー・ー

やだ・・・ やだよ。

涙がいっぱい溢れてくる。

・・上らなこよ。

「・・・ひな雛」

聞こえのある声。

これは・・・ひかる晃君の声だ。

「・・・」

私は泣きやみ、黙り込む。

「ちょっと来い」

やつひつと^{ひかる}晃君は無理やり私の腕を引っ張る。

見ると、そのままの中庭に着いていた。

「なんで泣いてるんだ?」

晃君は泣いてる私に優しく問い合わせる。

「どうして言わなきゃなんないんだよ」
「え？」

ついついやクザの時の声が出てしまつ。

「どうして言わないといけないの？」

私は言に直した。

「気になるし。俺の……せいかもしないから……」

晃君も下を向く。

・・・ホント、優しくあるよ。

「晃君……彼女いるなんて知らなかつた……」

私はうつむきながらボソッと言つた。

「・・・・・」

晃君は黙り込んでしまった。

・・・どうして黙るの?

聞いてきたのはやつねじやない・・・。

「まあ・・・・・誰にでも秘密はあるよね」

私は無理して笑顔を作る。

だつて「元気にしなきゃ、晃君困つねやつもんね。

「わりい・・・・」

「別にわあー、晃君のセツジヤないしー」

私は横を向きながら顔を赤らめる。

「・・・・彼女つてどんな人?」

私はずーっと聞いたかったことを口に出す。

「美人だよ」

「・・・それだけ?！」

「ああ」

はあ?

意味わかんない・・・。

全然見てねーんじゃねーの?!

「でも・・・、雛^{ひな}の方が美人だよ」

「・・・へ?」

私は一瞬固まる。

どんどん顔を赤らめる。

「ええええええええ？」

私は顔を真っ赤つ赤にし、思わず叫んでしまつ。

「う、、、嘘でしょ？？！？」

「臺灣へおでかけ？」

「い、意味分かんない！普通は彼女の方を言うでしょ？！」

「だってホントのことだし」

ホントのことって・・・。

彼女より私つて・・・。

嬉しいけど、おかしいよ。

「じゃあ俺帰るわ」

やつ 言つて 晁君ひがく。は 教室きょうしつ。へ 戻もどつてしまつた。

私は顔の色が元に戻らない。

真つ赤のまま。

変な人。

ホント変な人。

でも・・・そんなところが好きなんだよね。

共通点（前書き）

（登場人物）
朝方離。
早瀬雷斗。

共通点

私はじょじょと廊下を歩く。

変な晃君。

どうして彼女より私のほうが・・・？

おかしいよ。

私はこんなことを考へているせいで前にいる人に気づかず、

ドンッ

ぶつかってしまった。

私はぶつかった衝撃でしりもちをつく。

「いたたあ・・・」

当たった所をさする。

「大丈夫？」

ぶつかつた相手は優しく手を差し伸べてくれた。

「はい」

私はその手をとり、立ち上がる。

よく見るとその人は同級生の早瀬雷斗君はやせらいとだった。

「ゴメンね。ちょっと考え方してて・・・
「別にいいよ」

早瀬君はやせはニコッと笑う。

優しい笑顔だった。

ちょっと・・・晃君ひかるの笑顔に似てるような・・・。

・・・気のせいだよね。

「あのさ。確か・・・朝方だよな?」
あさがた

「うん?」

「やつか。じゃあね」

そつ言つて早瀬君はどこかへ行つてしまつた。

・・・早瀬君も変な人。

そこも晃君に似てる。

共通点多いなあ。

・・・ま。いつか!

私は悩んでいたことを忘れ、教室へ入つた。

そこには

また晃君の姿は無かつた。

また中庭に言つたのかなあ??

行こつかなあ・・・。

でも、 、 、 なんだか行きにくいしなあ ・・・。

ガラッ

教室のドアが突然開く。

サボリ（前書き）

登場人物
あさがたひな。
朝方離。

担任の先生。

多数

クラスの子

サボリ

「誰か杉本知らんか?！」

ドアを開けたのは先生だった。

息切れしている先生にみんなが視線を向ける。

「杉本君がビーしたんですかあ？」

クラスの1人の女子が先生に問い合わせる。

私もそれを聞いたかつた。

「用事があるんだがどこにもいらないんだ」

・・・え?!

クラス全員がザワザワ。

いな・・・い?

「ちやんと探ししたんですか?..!」

クラスのみんなが言ひ。

私もそれ思った!

「ああ・・・。でもビリもいないんだ・・・」

先生は下を向く。

どひって・・・?

どひっていの?!

おかしごじやん。学校を出ないかぎり絶対にいるが・・・。

かぎり・・・?

そうだ!..!

「学校出でないの?..!」

私は叫んだ。

「そりだぜー絶対出てるんじゃねーの?ー!」

みんなも同意してくれた。

みんなはいっせいに教室を飛び出す。

向かつた先は下駄箱!

やつぱり・・・。

晃君の下駄箱の中には靴が無かった。

さよならんだ・・・。

転校そりついにサボりかよ。

やつぱり変!

私だつたらゼーつたいサボんないけどなー・・・。

私はその後の授業の内容が耳に入らなかつた。

理由は晃君が^{ひかる}気になるから。

ただそれだけ・・・。

こんなに晃君^{ひかる}しか考えられないなんて・・・。

私どうしあやつたんだろ・・・。

初めて見た晃の・・・（前書き）

（登場人物）
朝方離。あさがたひな。
早瀬雷斗。はやせらいて。

『杉本晃・晃の彼女』

初めて見た晃の・・・

今日一日の授業が終わった。

放課後、家に帰ろうと思っていたけど、帰つてもやることがないのでどこか寄つて行こうとアクセサリー屋に向かつた。

「あれー？ 朝方じゅん」
あさがた

誰かが私の名前を呼ぶ。

私は声が聞こえる方を向くとそこには早瀬君がいた。

「早瀬君！」
はやせ

私は早瀬君の元へ駆け寄る。

「どうしてココに？」
「暇だから来たんだ」「あ。私もだよ！」
「じゃあ一緒に遊ぶか？」

「へ？」

それって、デート、いいじゃん。

「ダメか？」

「え？…」「…」「ううん…別に…ことよ」

私は思わず動搖。

だって…初めての男の人とのデートだもん！

緊張だよお。

その後、色々と歩き回った。

「ビリ行きたい？」

早瀬君は優しく問い合わせる。

「うーん…。別に希望はないなあ」「じゃあプレゼント買つてしまおう」「え？…いいの？」

「ああ」

「…」

早瀬君の優しい笑顔。

早瀬君は全部が優しいな。

私は早瀬君に引っ張られて女性向けの店へと連れて行かれる。

「これせじひつ？」

そう言いながら早瀬君は胸元がパツカリと開いたワンピースを差し出す。

「い・・・いんなの恥ずいよー。」

私は顔を真っ赤にしながらワンピースを元の場所に戻す。

その後、何分ぐらいた店の中を歩き回つただろ・・・?

やつ思ひよひになつてきた。

「お。これ可愛いじゃんー。」

早瀬君が差し出してくれたのは真っ白いブーツ。

雪のよつた感じでふわふわのブーツ。

私も可愛いと思った。

「うん 可愛いー。」
「じゃあ買つてやるよ」

「・・・え?..」

早瀬君は無言でレジへ行き、9000円ぐらいのブーツを買つてくれた。

「はー」

一ヶ口り笑いながらブーツの入った袋を差し出す早瀬君。

私はその袋を受け取る。

「あ・・・ありがとね
「いいよ。じゃあ帰るか」

早瀬君はクルツと出口の方を向く。

私も向いたその時、

ひかる
晃君がいた。

なんでいるの?!

「女性向けの店だよ?!

よく見ると、晃君の横には女性が立っていた。

だ・・・れ？

まさか彼女？

その女性は美人だった。

晃君とお似合いだった。

その人がうらやましい・・・。

私はいつの間にか目に涙が溜まっていた。

「朝方？！なんで泣いてんだ？！」

「ゴメン・・・。帰る」

そう言って走った。

そこに居たくなくなつたから。

幸せそうな2人を見たくなかったから・・・。

溢れる涙（前書き）

登場人物
あさがたひな
朝方離。
ひつじ・加絵
かえ

溢れる涙

ヒック・・・。
グスン・・・。

私は家に帰るなり、自分の部屋に入った。

そしてベッドにうずくまり、今泣いている。

・・・あの人美人だつたな・・・。

いいな。

私も晃君ひかるとお似合いの女ひめになりたいよ・・・。

「ひな
雛ちゃん」

ひつじの加絵さんかえが静かに部屋に入つてくる。

私は目を拭い、加絵さんかえの方を向く。

「どうしたんですか？」

私は無理して笑顔を作る。

そんな私を見た加絵さんは、険しい顔をする。

「なんで泣いてたの？」

私は黙り込む。

「おしえて？」

加絵さんはまた泣きそうな私に、優しく問い合わせる。

「・・・好きな人の彼女見たんです」

私は下を向きながらボソッと言った。

「そつか・・・ほんとに彼女なの？」

「だつて・・・本人に聞いたんですから・・・」

「彼女の名前とか顔知ってるの？」
「知りません」

「じゃあ違つかもしれないじゃない！」

加絵さんの顔はパアツと明るくなつた。

「頑張つて

加絵さんは私の肩をポンッと叩き、部屋から出て行った。

頑張れって・・・。

何を頑張るのよ・・・。

彼女に決まってる・・・。

だって、2人とも幸せそつた顔してたんだもん・・・。

頬を伝う一粒の涙。

あ。また涙出しちゃった。

バカな私。

泣き虫なんだから・・・。

元気付けてもダメだった。

涙が止らない。

どうしても不意に涙が出てくる。

……どうして？

どうしてこんなに悲しいの？？

ただ・・・晃君に彼女がいたってだけなのに・・・。

ひかる

私はバカだな。

ホントバカ・・・。

涙が溢れる。

床が濡れちゃうくらい溢れる。

・・・止らない。

本当のことを知らなきゃ止らないよ・・・。

私はムクッと立ち上がり、部屋を出て、家を飛び出した。

向かった先は・・・

晃君の家。
ひかる

2人は兄弟（前書き）

（登場人物）
朝方離。あさがたひな。
杉本晃。すぎもとひかる。
早瀬雷斗。はやせらいと。

2人は兄弟

ピーンポーン

私は息切れしながら晃君家のチャイムを押す。
ひかる

私はここに来る前、真実を知るために溢れる涙を流しながら走つて
来たのだ。

ガチャツ

扉が開く。

「はい？」

なんと出てきたのは早瀬君はやせだった。

「は・・・早瀬君はやせ?！」

私は口をパクパクさせながら早瀬君を指差す。

「朝方……はあい」

早瀬君はいつぺんとまどつたが、満面の笑みで挨拶。

「な……なんでいるの?...!」

「それは俺が教えてやるよ」

「この声……。

晃君だ。

晃君はよつといふ感じで出てきた。

「ひか……る君……」

「久しぶりだな。」

「ひな」

晃君は「『ツ』と笑つ。

でも私の視線を下に向ける。

「俺と雷斗は兄弟なんだ」

「・・・へ?」

兄・・・弟?

「え?...名前違ひじゃん...」

「だつて親違う」

「え?」

親が・・・違う?

どうこう事?

「俺達のおふくろは、浮氣したんだ。んで、おふくろと親父は離婚して、それぞれ再婚したんだ。俺はおふくろ、雷斗らいてうは親父の所へ引き取られたんだ」

「わう・・・だつたんだ」

そんなの最低だよ。

2人の親は何考えてんのよ・・・。

頭おかしいんじゃないの・・・?

・・・つて!

こんなこと聞きたいんじゃない一つのツ――――――

眞実（前書き）

（登場人物）
朝方離。あさがたひな。
杉本晃。すぎもとひかる。
早瀬雷斗。はやせらいと。

眞実

「つてか、こんな事聞きに来たのか？」

晃君は普通のことみたいに聞く。

「え。あ・・・違う！」

「何？」

聞いていいのかな・・・？

つてゆーか、いざ 聞く つてなつたら緊張するんですけどー。

「・・・えつと」

思わず動搖。

「えつとじじゃ分かんねーよ？」

「昨日のあの女人誰なの?！」

「いつ・・・ちやつた。」

私は下を向く。

「なんで知ってるの？」

「昨日、早瀬君といたら偶然見ちゃって・・・」

「雷斗・・・と?」

晃君はクルツと早瀬君を見る。

キツと睨んでるよつだつた。

「なんで睨むんだよ。ジーセお前だつて有美佳^{ゆみか}ちゃんといたんだろ?」

有美佳^{ゆみか}・・・?

誰それ・・・?

まさか彼女の名前?

晃君はクルツといつちを向く。

「お前だつて雷斗（らうと）といたんだろ？俺だつて誰（だれ）といったつていーだろ？」

なに・・・それ・・・

だんだん怒りが込み上（あが）げてくる。

「早瀬君関係ないじゃん！」

「・・・つひかさ、なんで言わなきやなんない訳？」

・・・そんなに言つたくないの・・・?

やつ言いたい。

でもせつと面壁になつちやつ。

「じゅあ・・・どうして言つてくれないの？」

私はおそれおそれ晃君（ひがみくん）の顔を見る。

「言つたくなーから」

即答する晃君。
ひかる

「……どうして言つてくれないの？」

そうだよ。

いつも何も言つてくれない。

晃君の事聞いたのは洞窟のじとべりこだ。

ひどこよな。

彼女いるからって……。

「彼女」
「え？」
「彼女といった」
「……」

思わず黙り込む私。

「言つたけど……」

……せっぱりね。

そうだと思った。

「・・・彼女美人だね」

「ああ」

「お幸せに」

そう言いながら私は手を振り、2人と別れた。

そう・・・だよね。

私より彼女優先だよね・・・。

涙が込み上げてくるのをこらえる私。

これぐらいでバカみたい。

「朝方！」

後から私を呼ぶ声が聞こえる。

振り向くと早瀬君が私を追い駆けて来ていた。

「早瀬君・・・？」

「お前……晃のこと好きなのか……？」

かああ

思わず顔を赤らめる。

でも正直に私はほんますべく。

「……俺じや、アイツのかわりのならねーか？」

「……へ？」

告白（前書き）

登場人物
朝方離。
早瀬雷斗。

告白

・・・え？！

かわ・・・り？

私は思わず硬直。

「ハハッ。急でビビったよな。わりいわりい」

早瀬君は普通に笑ってる。

・・・あんな」と言つたのに。

「別に・・・」

私がボケ・ツとしてると、不意に早瀬君が近づいてきた。

「また考えといて」

ボソッと耳元でささやかれ、思わずビクッとしてしまう。

そんな私を見た早瀬君はクスッと笑い、来た道を戻つて行つた。

・・・何あれ・・・！

バカにしてるし～！！

ムカツク。

でも優しいんだよね。

・・・今まで一緒にいたのに気づかなかつた・・・。

私って鈍感・・・？

私は行こうとした道を歩き出す。

でも・・・返事って言われてもなあ・・・。

早瀬君は私の事好きで、私は晃君の事好きで、晃君は彼女の事が好きで・・・。

なんか微妙な関係だなあ。

でも・・・。Jのままひかる君の事好きでも意味が無こと思ひっこ・・・。

どおせひかる君は私のことなんか興味無いだひっこ・・・。

Jのまま悲しげ思ひこすみよつせ・・・。こと思ひ。

でも・・・すぐ止諦めると言われても無理だしね。

うわあーん。

ぬむよおーー

私は思わず頭を抱える。

ピッカと頭のビックでひらめいた。

わへ・・・。それでこいやー

よし！決めた。

嘘の気持ち（前書き）

（登場人物）
朝方離。あさがたひな。
早瀬雷斗。はやせらいて。

嘘の気持ち

次の日、

ただいま学校で『や』います。

今日一日、晃君と話してない。

ちよつとシラック・・・。

私はトイレに行きたくなり、向かおつとした時、田の前に早瀬君が通つた。

「早瀬君！――」

私は思わず呼び止める。

「朝方・・・？」

私の声を聞いて振り向く早瀬君。

私は早瀬君の腕を引っ張り、屋上へ連れて行く。

「ちよつと来て――！」

その姿を誰かが見ていたのを知りもしなかった。

——屋上——

「ビーしたんだよ?」

早瀬君は訳もわからず連れてこられたので頭上にはてなマーク。

「・・・昨日の返事」

私はボソッと顔を赤らめながら言へ。

その言葉を早瀬君は聞き逃さなかつた。

「うう」

もう・・・言ひてもこゝみやね。

「私・・・早瀬君と付き合いたい」

・・・え？！」

言つちやつた
・・・。

言ひぢやつたよ晃君。
ひかね

もついで晃君への恋は終わりだね。

忘れよう

これをきつかけに・・・。

思わず頭より上に腕を上げる早瀬君。
せやは

そんなに嬉しいんだ・・・。

もしかして私悪い事しちゃつた？

それから私は瀬君といふ名前であることになつた。

チョコレート（前書き）

『登場人物』
朝方離。
早瀬雷斗。

『女性』

チャーチル

それから早瀬君のことを《雷斗》と呼ぶようになった。

「雷斗」

「ンー？」

私は学校の帰り、いつもどおり雷斗と帰ってくる。

私は雷斗の顔を見る。

「バレンタインチヨウガる？」

「はあ？あ・た・り・ま・え・だ・るシ――」

いつも言いながら私の額にアーチペンをあら。

私は痛くて額を手であおひ。

トパンされた額がジンジン痛む。

「で？くれんの？」

ズイッと顔を近づけてくる雷斗の顔。

私は思わずドキッとしてしまつ。

「あ・・・あげるよー当たり前だよね。あはは」

私は照れ笑い。

そんな姿を見て雷斗らいとはクスクス笑う。

「ありがと」

雷斗らいとは私の前髪をかきわけ、額に軽くキスをした。

痛かつた額が、今度は熱く火照る。

バレンタインデーは明後日。

それまでに完成させなきや！！

私は雷斗らいとと別れるなり私服に着替え、財布を持ち、家を飛び出す。

私服と言つても普通の白いシャツの上に灰色のパーカーをはおい、ジーパンにショートブーツ。

普通の私服だ。

私が向かつた先はc oo p。

そういうのには今、バレンタインデーのため、チョコなどのバレンタインデーに使う器具等を売っている。

私は友達と雷斗^{ひこう}、あとほか・・・。

・・・、晃君^{ひかる}、・・・。

頭の隅にこの名前がよみがついた。

な・・・なんである人に渡さなきやなんないのよッ！

思わず顔を赤らめぬ。

この気持ちを忘れる為に雷斗^{ひこう}と付き合ったのに意味無いじゃない・・・。

・・・でも・・・

結構・・・晃君^{ひかる}には世話をになつたしな・・・。

義理チヨコで渡せばいいんだ！

頭良い

私は晃君の分のチヨコをカゴに入れる。

その他、器具などもカゴに入れ、レジでお金を払った。

よし！

全部買つたし。家帰つてチヨコ作りの練習しますかあ――――――

そう思い、ルンルン気分で出口に出よつとした時、

「朝方・・・雛・・・さん？」

女性の声が背後から聞こえた。

振り向くと見覚えのある人が
・
・
・。

彼女との再会（前書き）

（登場人物）
朝方離。あさがたひな。
佐々紅有美佳。ささもみゅみか。

彼女との再会

「あな・・・たは?」

私は出口前で立ち尽くす。

「だつて・・・だつてこの人は、雷斗にブーツ買つてもらつたときこ
ひかる 晃君といた彼女なんだもん!」

「まあ ハハで話すのもなんだから喫茶店でも行きましょ?」

ひかる 晃君の彼女さんは喫茶店へ向かい、スタスターと歩いて行く。

その人をトボトボといつていいく私。

・・・何言われるんだろう?

～カラソロロン

喫茶店に入るとドアにつけてあつた鐘が鳴つた。

店員さんに誘導され、窓側の席に向かい合ひ座る。

「「」注文はありますか？」

店員さんが笑顔でオーダーしてくれる。

「いや。いいです」

彼女さんは即答。

店員さんは・・・そうですか という感じで違うトーブルへ向かつた。

「急に「」めんなさいね」

「いえ！大丈夫です」

私は緊張気味のせいで張りきつてしまつ。

そんな私を見た彼女さんはクスッと笑う。

「私は佐々紅有美佳。 いちお晃の彼女よ」

ズキッ・・・

この言葉を聞いた瞬間胸が痛んだ。

・・・やつぱり。

晃君と雷斗が言つてた

有美佳

つて名前・・・。

彼女の名前だつたんだ。

「あ・・・初めまして！朝方雛です」

「ええ。知つてるわ」

・・・え？！

私のこと知つてる・・・？

「あのお・・・？なんで私のこと・・・？」

「晃に聞いたのよ」

ひか・・・る君に・・・？

何言つたつていうの？！

私は思わずつむじてしまつ。

「晃がね、転入した時あなたのことばっかり言つてたわ・・・。その時すごく嫉妬した。だつて知らない女の話ばっかりするんだもん。」

少し・・・悲しかったわ

私のこと・・・?

「何・・・言つてたんですか?」

私は有美佳さんの顔を見る。

「笑顔が可愛いとか、明るい子とか、いつも俺のそばにいる・とかよ」

思わず顔を赤らめる。

・・・可愛い。

そんなこと言つてくれるなんて・・・。

嬉しい!

「あなた・・・何様のつもり・・・?」

「へ?」

有美佳さんは私をキツと睨みながら見下す。

「あの人には私っていう彼女がいるのよ? !なのに今話聞いたら顔

赤くしちやつて・・・・・あの人のこと好きなの？！好きなら私あなたのこと恨むわよー。」

・・・ツ。

私は・・・・・晃君のことが好き・・・・。

でも・・・

今、雷斗といつ彼氏がいる。

私は・・・・・ビッチが好きなの・・・・？？

「ねえー・ビッつなのよーー。」

有美佳さんは下を向いてる私にイライラしているようだ。

「私は・・・・」

ボソッと口に出す。

私の気持ちは・・・・！

本当の気持ち（前書き）

（登場人物）
朝方離。
佐々紅有美佳。
杉本晃。
早瀬雷斗。

本当の気持ち

私は一ツと有美佳さんの顔を見上げる。

「私は晃君のこと好きですよ！」

そう・・・これが本当の気持ち。

付き合ってる彼氏よりも大好きな人。

・・・晃君。

いつもあなたばっかり考えてる。

頭の中はあなたのことがばかり。

誰といったか教えてくれなかつた時、私の心は泣いていた。

晃君のこと、いっぱい知りたかつたから。

でも・・・彼女がいるつて聞いた時は涙が溢れるくらいショックだつたよ。

だつて・・・

あなたが大好きだから。

・・・ツ！！

有美佳さんは舌打ちして私をすごい顔で睨みつけて喫茶店を出て行
った。

・・・これでいいんだよね。

あ
！

チヨコノート---

私は練習しなきや いけないことを思い出し、喫茶店を飛び出した。

晃君！！

私、雷斗よりもおいしく作るからねッ！！

私はこの日学校
——次の日——

靴を入れる為に下駄箱に立つた時、背後に気配を感じた。

・・・ 晃君ひかるだつた。

「おはよ」

私は晃君ひかるの顔を不安そつに見る。

・・・ 話してくれるかな??

晃君ひかるはチラッといつちを見て、

「・・・ はよ」

と挨拶あいさつしてくれた。

私の顔はパアアツパアアツと明るくなつた。

嬉しいな

「雛ひなーおはよ 」

この声は・・・

・・・雷斗だ！

「お・・・はよ」

「よお雷斗」

「お一晃」

2人の何気ない挨拶。

なんか変な空氣・・・。

「じゃあな」

晃君は私の耳元でそつそつとやき、先に教室へと歩いていった。

私は晃君の吐息が耳元にかかり、ビクッと反応してしまつ。

晃君の吐息がかかった耳元が赤く染まり、熱くなる。

「離。何話してたの？」

「え？ おはよ つて・・・」

私の顔はキヨトンッとしてる。

「・・・そう」

ホツと肩を撫で下ろす雷斗。

心配してたのかな・・・??

——昼休み——

私は暇だったので雷斗のいる教室へむかつた。

雷斗らいとはB組で私はD組。

クラスが別なのだ。

「らい・・・早瀬君はやせいますかあ??」

私はクラスの入り口に体を乗り出す。

「あれー? わついたんだけなあ・・・」

クラスの1人の女子が答えてくれた。

・・・いないのかあ・・・。

私はその女子に

ありがとう

と言つてクラスから離れた。

私はまたあの芝生へ向かつた。

告白（前書き）

杉本晃 朝方離登場人物

「あーー・せつぱつ」

私が声をかけたのは芝生で寝転んでいる晃君だ。

「なんだよ離^{ひな}。雷斗^{らいと}のどいいかねーのか?」

「・・・え?」

「俺・・・知つてんだ。お前と雷斗^{らいと}が付き合つてゐる! と・・・」

「な・・んで?」

「見ちやつたんだ・・・。よかつたな両想いで」

嘘^{うそ}・・・!

両想^{りょうそう}こじやなこよ・・・!

私が好きなのは晃君^{ひかる}なんだよッ! -!

「ちがい! しー・ー!」

私は思わず叫んでしまつた。

「え?」

キョトンとしたする晃君^{ひかる}の顔。

・・・ハツ

口に手を当てる私。

「うう・・・しよう。

なんて言えばいいか・・・。

「うよ・・・両思いじゃないよッ!!」
「じゃあなんで付き合つてるんだよ?」

「そ・・・れは」

私の視線はだんだん下へと向いていく。

「好きな人がいるけどその人の恋は叶わないからその人の恋を忘れるためよ・・・」

「ふ〜ん・・・」

あつむりとした返事。

ちょっと寂しい気も・・・。

「・・・誰か分かってるの?」

「知らん」

「・・・晃君だよ?」

「え? !」

・・・言つてしまつた・・・。

皆白みたいだ。

「私は晃君が好きなの」

「・・・でも俺・・・」

「有美佳さんがいるもんね。わかつてる」

「わるいな・・・」

「いいよ!」

これでいい。

本当の気持ち伝えられたからいいの・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4757d/>

あなたが一番好きなの！！

2011年1月20日04時08分発行